京都市立芸術大学の所蔵資料の管理

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 京都市立芸術大学芸術資料館 公開日: 2025-03-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松尾, 芳樹 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15014/0002000140

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0 International License.

京都市立芸術大学の所蔵資料の管理

松尾　芳樹

【抄録】
京都市立芸術大学の前身である京都市立美術大学は昭和 25 年（1950）に開学した。戦前の京都市立美術工芸学校や京都市立美術専門学校が所蔵した教育資料は、美術大学が継承することになり、その管理が模索された。図書と参考品は明確に区別して管理されるが、参考品の管理にも図書管理の方針が援用された。これは資料収集において柔軟な対応を可能にして意義があった。時代の変化の中で、古い教育資料に歴史資料としての価値が見いだされるようになると、台帳の再整理の必要性が生まれた。その過程でデータベース化が進められ、一括資料の収集も増加した。一方で施設面の改善により、美術作品の収集という新たな収集方針も加えられ、幅広い収集対象が形成された。美術大学を受け継ぐ京都市立芸術大学に設置された芸術資料館が持つ大学博物館の顔は、この歴史の中で培われた柔軟な収集態度を基盤としている。

１．はじめに

京都市立芸術大学（以下「芸大」という）の前身である京都市立美術大学（以下「美大」という）は昭和 25 年（1950）に開学した。明治 42 年（1909）に開校した京都市立絵画専門学校（以下「絵専」という）から改称した京都市立美術専門学校（以下「美専」という）が新制大学として昇格したものである。しかし、大学とはいっても、美専の校舎をそのまま使用しており、その校舎の半分は、京都市立日吉ヶ丘高等学校と共有していた。京都市立美術高等学校（以下「美高」という）が京都市立日吉ヶ丘高等学校美術課程となったためである。美大の教育は、基本的には同 13 年に日本絵画の教育をおこなう公立学校として開校した京都府画学校の教育を継承するものである。従って美高の前身である京都市立美術工芸学校（以下「美工」という）と美専が教育の現場で使用した図書・教材はそのまま学校に蓄積されていた。美専、美工の時代に、これらの教材は図書台帳と参考品台帳の二つの台帳で管理されていたが、美大開校後その帰属については、しばらくの間、高校と大学で協議が行われ、結果として資料は美大に継承されることになった。美大の時代になって、これらの所蔵資料がどの様に管理され、新たな利用の道を模索したのか、本稿では、美大以後芸大に至る資料管理の展開とその収集の成果について検証する。

２．美大図書館

美大開学にともない初めて図書館の名を持つ施設が学校に設けられた。このとき美専と美大の両校名[1]で『昭和二十六年一月二十五日現在調図書目録』（以下『26 年図書目録』という）が作成され、美工、美専期の図書の現況が確認された。この目録は美工と美専の図書を対象としたため、美工以来使用された十門分類[2]によって作成されている。ちなみに、美専期ではあるが昭和 24 年（1949）以後に購入された図書は NDC による分類に切り替えられており、この目録に収録されていない。従って、美専の『図書台帳』は昭和 24 年 7 月に作成されたが、これは新規購入図書のみの台帳である。新しい図書台帳はかつての書目別番号ではなく、図書 1 冊ごとに図書番号が与えられるようになり、旧蔵図書を 10000 冊とみて、10001 番から登録を開始している。このとき、図書の検索用にはじめて目録カードも作成されるようになった。旧蔵図書を 10000 冊とみた根拠としては、『26 年図書目録』のうち、非図書資料である 1 門 4 類、9 門、10 門を除いた図書のみの冊数が概ね 10000 冊であることから、美大での図書の管理対象として、早い時点で一定の線引きが想定されていた可能性がある。

昭和 23 年（1948）に美工が新制高等学校である美高となり、同 24 年に京都市立日吉ヶ丘高等学校美術課程に改組された。美大開校後、同 28 年には今熊野校舎を離れることになるが、当時、美校の図書や参考品の帰属が協議された。結果としてこれらは美大に継承されることが決定するのだが、同 29 年には、旧蔵図書の台帳収録が開始しており、この時点までに、美大への資料の帰属が決定していたものと思われる。美大の資料管理が本格的に開始するのは同 29 年からと思われる。

昭和 42 年（1967）に美大は京都市立音楽短期大学（以下「音大」という）と統合し、美術学部と音楽学部からなる芸大となった。同 55 年に、両学部は沓掛校舎へ移転し、両学の図書館も新校舎の附属図書館に統合された。音大の図書館は、独自の図書分類をしていたが、美大の NDC に統合された。両学部とも図書は NDC の 7 門に集中するため一般的な分類に比して独自の細分化がなされている。また、図録、楽譜、音響映像資料といった、従来から作成されていた個別の目録も継承している。この統合の準備を契機として、現在の附属図書館の図書資料の構成と管理方法が確立している。

昭和 60 年（1985）に運用開始した国立情報学研究所の NACSIS-CAT への参加は、他大学に比較して遅く、平成 22 年（2010）に運用が開始した附属図書館の電算化によってようやく可能となり、現在に至っている。図書台帳の電算化にともない、大学開学以前の旧蔵書の目録整備も進められたが、電算化台帳の収録の対象となったのは、基本的に雑誌を含む図書に図録、楽譜、音響映像資料を加えたものであり、美大の蔵書管理が開始した当初の旧図書目録収録資料への線引きに従ったものといえる。

３．参考品の整備

美大図書館の運用は、開校とともに開始するが、先にも述べたとおり、本格的な資料管理は旧蔵書の帰属が確定した後に開始したと考えられる。暫定的にそれまでは、昭和 24 年（1949）に作成された新収図書の台帳と目録カードが、旧台帳とともに使用されていたのであろう。旧図書目録に収録された 1 門 4 類、9 門、10 門の資料は、図書台帳への収録対象とはならなかったと考えられるところから、新しい資料管理体制を構築しはじめた同 29 年以後、これらの資料をどのように扱うかが検討されたものと思われる。同 29 年に美大卒業第 2 期生に対して最初の卒業制作買い上げが行われた。これを契機として、この年『卒業製作台帳』が作成された。卒業制作は主に 10 門の 3 類と 6 類に収録される資料だが、学校の歴史を物語る資料として、早い時点で資料価値が評価されたことになる。こ

の台帳では美工、絵専、美専の区別なく古いものから順に資料１点ごとに資料番号を与えている。美工の卒業制作が収録されているため、資料の帰属が定まった後、台帳作成が行われたことがわかる。台帳の記述は、図書台帳に準じた方針が採られており、図書台帳に非常に近似した項目の立て方となっている。従来平面作品しか買い上げの対象とならなかったものが、美大においては各科に対して買い上げが行われたため、彫刻や陶磁器、漆工など立体作品も受け入れられるようになるが、従来のように形態別に台帳記入を行うことはなくなった。

卒業制作の買い上げは、その後も継続し、概ね専攻ごとに買い上げを積み重ねていくが、学生運動を受けて昭和 45 年（1970）に策定された改革案以後、専攻の増加とその区分の不明確さにより、買い上げの対象が流動的になっていった。戦後の買い上げ作品は平均して年に５点程度だが、沓掛移転後は大学院生も普通に買い上げの対象となっており、買い上げ者の比率は減少傾向をみせている。

こうして、昭和 29 年（1954）以後の美大における資料管理は『図書台帳』と『卒業製作台帳』と目録カードを主とし、旧台帳でこれを補う方法がとられることになった。同 26 年に松井佳一から粉本類である《土佐派絵画資料》が寄付されたが、当時新台帳は『図書台帳』しかないため、台帳には収録されていない。幅広く教育に資することのできる図書に比べると、参考品と呼ばれる絵画や工芸品の用途はかなり限定的である。教養科目を重視する戦後の高等教育の中で、参考品に対する需要もまた変化が求められていた。

美大初期における図書と参考品の区別は十分明確にされていた。そして、旧台帳において９門、10 門に分類された非図書資料の管理は、参考品の管理に統合する方針が立てられた。『参考品台帳』は美専時代のものしかないため、昭和 34 年（1959）に洋装冊子の台帳として新たに作成された。台帳は『卒業製作台帳』と同様に通番によって記載され、資料１点ごとに資料番号が与えられた。台帳の通番は旧参考品台帳から、絵画、染織、陶磁器、漆工、有職、武具、馬具、彫刻、雑の順に転記し、１点ごとに資料番号を与えるものである。組物であっても、物理的な１個体に対して番号を付与する点は図書管理に近い方針をとり、分類主義をとっていない。これは、博物館コレクションの形成においては高い柔軟性を示し、興味深い点である。

そして、新たな『参考品台帳』では、旧台帳の中の非図書資料が収録されることになり、まず、旧台帳 10 門の２類甲乙及び５類甲の軸装模本資料を収録している。こうして、旧台帳のうち 10 門２類甲乙、３類、５類甲、６類が『卒業製作台帳』『参考品台帳』へと切り替わったのである。

美大開校後、新台帳作成までの間に参考品として入ったものは 17 件と少ない。受入時期などの経緯

表１　陳列館竣工年前後の寄付作品

受入年	作者	作品名	備考	
昭和36年	須田国太郎	走鳥	油画	教員
	黒田重太郎	暮秋好處	油画	教員
昭和37年	麻田辨自	樹園	日本画	教員
	福田翠光	池	日本画	卒業生
	池田遙邨	灯台	日本画	教員
	宇田荻邨	野々宮	日本画	教員
	津田周平	さいちょう	油画	教員
	清水六兵衛(六代)	銹泑秋草花器	陶磁器	卒業生
	森野嘉光	塩釉花器	陶磁器	卒業生
	森野泰明	青釉花器	陶磁器	卒業生
	新開寛山	群線花瓶	陶磁器	卒業生
	鈴木健司	萌樹	陶磁器	卒業生
	稲垣稔次郎	三十三間堂内陣図屏風	染織	教員
	辻晋堂	拾得	彫刻	教員
	藤本能道	日蝕	陶磁器	教員
昭和38年	小合友之助	雨	染織	教員
	黒田重太郎	平安春色	油画	教員
	川端彌之助	疏水	油画	教員
	猪原大華	池	日本画	教員
昭和40年	高林和作	藁塚	油画	教員
	山口華楊	樹	日本画	教員

が不明のまま台帳作成当時収蔵されていたものと、教育資料として教員などが寄付した参考品が収録されている[3]。

本格的に参考品の収集が開始するのは昭和 36 年（1961）からである。今熊野校地に翌 37 年に竣工する陳列館の建設をみこして、学校関係者が作品の寄付をおこなう機運が生じた。この陳列館は、大学に学芸員養成のための博物館学課程を設けるに際し実習場所として建てられた施設[4]で、収蔵庫と展示室を備えた博物館的仕様の建物である。コンクリート造 2 階建てで、１階に収蔵庫（121.7 ㎡）、２階に展示室（143.6 ㎡）が設置された。新たな収蔵場所を得て、これまで図書館の書庫等に置かれていた資料の一部はこちらに移動された。

表２　京都市立芸術大学芸術資料分類表

中区分表	
000	卒業制作品及学校関係資料
010	絵画科
020	彫刻科
030	工芸科
090	学校関係資料
100	絵画写真類
110	絵画写真類
120	版画
130	書跡（篆刻･印章）
140	写真（映画フィルム･スライド）
150	商業美術（ポスター･漫画など）
200	彫刻･建築
210	彫刻･建築（仏像･神像）
250	建築
300	工芸美術
310	陶磁工芸（七宝･硝子）
320	塗装工芸
330	染織工芸（刺繍･レース･紐）
340	金属工芸（武器･武具）
350	木･竹･紙工芸
360	皮革･牛角･宝石工芸（プラスチック工芸）
400	民族･考古資料
410	民族(風俗)資料
450	考古資料（歴資資料）
500	音楽関係資料
900	模造
910	絵画（模写）
920	彫刻（模刻）
930	工芸（模造）
960	拓本
990	参考図絵類

教員あるいは卒業生が学校に作品を寄付することは、従来極めて珍しいことだったが、収蔵施設とそれに伴う展示施設を得たことによって、大学が作品収蔵の場として内外に認識されることになり、卒業生や教員から作品の寄付の申し出が増加した。戦後は、予算不足のため、参考品の購入は困難になっていたが、陳列館の開設により、資料収集の手段として寄付が重要さを増した。表 1 は陳列館の竣工前後の期間で、学校関係者から寄付された主な作品を列挙したものである。大学の所蔵品に美術館的な性質が生まれるのは、この陳列館竣工以後のことである。また、保管場所ができたことで、ようやくこれら参考品の整理作業を行う環境が整えられたことになる。

資料の保管場所としての認識が生まれたことによって、学校関係者の作品以外の寄付も受けるようになり、《佐藤辰三写真資料》（1961 年受入）《工業試験場旧蔵陶器》（1965 年受入）のような外部で生まれたコレクションの受入や、《インドネシア染織資料》（1968 年受入）、《中東印度写真》（1976 年受入）、《アフガニスタン民族資料》（1977 年受入）のように、大学教員の調査活動によって収集された資料の受入など寄贈収集が活発となった。また、大学に版画の教室が生まれたことで、昭和 48 年（1973）以後版画の収集が行われるようになり、ニューヨーク州立大学教員養成学部との交換作品や関係者からの版画作品の寄贈作品によって新たな資料群を形成している。

昭和 45 年（1970）8 月『京都市立芸術大学芸術資料分類表』が作成された。前年に音大と併合し芸大となったため、音楽資料の収集も課題と

なったものと考える。表２はその中区分表であるが、図書の 10 進分類法に倣ったことがわかる。右端の位にあてられる小区分は基本的に地域区分とすることが多く、内容については、その下に“.”を加えて細分している。陳列館開設後の収蔵資料の構成に対する、館員の考え方をうかがわせるものである。しかしながら、この分類表は実際には機能しなかった。

陳列館の利用開始後、展示と平行して、資料の整理が進められるようになり、陳列館の竣工によって、博物館業務が本格的に開始したのである。展示室は昭和 37 年（1962）3 月の「昭和 36 年度卒業記念展観」を最初の展示とし、同 52 年 7 月の「女史箴図巻・オルソラ壁画模写展」に至るまで図書館主催の公式の展示を 52 回開催した(5)。しかし、毎年継続する卒業製作の買い上げや作家からの寄付により収蔵資料が増加すると、収蔵庫も手狭になりはじめ、最終的には、展示室にも収蔵せざるを得ない状態に至るのである。音大との併合を契機とする大学の移転の問題は図書館においても施設整備の契機として重要な課題とされた。

３．芸術資料館の開設

昭和 55 年（1980）に大学が沓掛校舎に移転すると、収蔵庫は恒温恒湿空調が施されたものとなり、床面積も拡大した。展示室は 130 ㎡、収蔵庫は第 1 が 220 ㎡。第 2 が 40 ㎡となり、収蔵庫が 2 倍の広さとなった。附属図書館に資料管理のために学芸員 2 名が配置され、『卒業製作台帳』及び『参考品台帳』は学芸員が管理することになった。収蔵施設が拡充されたことから、この移転年度以後資料寄付が増加した。大学教員の調査研究活動により収集された資料としては、《聖ウルスラ物語壁画模本》（1981 年受入）《ニューギニア民族資料》（1985 年受入）が、外部コレクションからの寄付としては《内山コレクション近世染織資料》（1980 年受入）が、学校関係者からの美術品寄付として《五代・六代清水六兵衛陶芸作品》（1980 年受入）《近藤悠三陶磁作品》（1985 年受入）などがある。

移転作業が一段落した昭和 57 年から収蔵品の再整理が開始した。旧図書台帳の 10 門 1 類にあてられた巻子資料の『参考品台帳』への収録が行われた。これは、昭和 30 年代に行われた旧図書台帳の非図書資料の再登録作業を継承するものである。この時、巻子本資料のうち、コロタイプ印刷などの複製については、参考品とはせず図書として扱うこととし、図書館の電算化に際し台帳登録された。

また、再整理作業の中で大学のコレクションの特徴を明確にするため、教員や卒業生の作品のほか、京都の美術に関わる資料の収集や、素描下絵類の収集拡大の方針がたてられた。既存の京都府画学校や美工の教育資料に加え、《六角堂能満院仏画粉本》《土佐派絵画資料》をはじめとする模本や粉本、写生など、絵画制作に関わる素描や下絵類の充実を図るためである。

戦後における収蔵品の図録化としては『美術大学　蔵品図録』（便利堂、1960.7）、『蔵品聚英』（八宝堂、1969.3）、『日本画聚英』（京都書院、1980.5）、『図案聚英』（京都書院、1990.8）『仏教図像聚成』（法蔵館、2004.3）があり。附属図書館時代に『京都市立芸術大学収蔵品目録』として「民族資料－ニューギニア資料編」（1985.3）、「版画編」（1985.6）、「絵画－模写･模本編」（1987.3）、「絵画－日本画･東洋画･洋画編」（1989.3）が刊行された。また、昭和 60 年（1985）から毎年新収蔵品目録を刊行している。

昭和 51 年（1976）に、初めて国庫補助金の交付を受け、わずかな金額ながら収蔵品の購入が開始する。最初の購入品は長谷川潔の《ムードンの煙突》であった。以後補助金による資料購入が継続したが、平成 15 年度を最後に補助金が停止すると、購入が予算を圧迫するようになり、購入の継続は同 23 年（2011）で停止した。

平成 3 年（1991）に京都市立芸術大学芸術資料館が設置され、翌年博物館相当施設の指定を受けた。

いわゆる大学博物館となったが、施設も予算も従来と変化はなく、既に実施している業務を継続するため、資料管理の上では大きな変化はなかった。むしろ、同 5 年に収蔵品のデータベース化を開始したことが、大きな転機を生み出している。データベース構築作業の中で可能な限り資料の構造化を計り、『卒業製作台帳』と『参考品台帳』を統合したのである。収蔵番号を 12 桁の通番とし、これに番号属性と資料属性を付与して件数と員数を再構築した。平成元年度に収蔵番号 3000 を以て旧台帳の使用を停止し(6)、以後資料の台帳はデータベースに移行した。移行後は卒業制作も参考品もまとめて従来から使用されることのあった収蔵品という名称で呼んでいる。このデータベースの管理については後に詳述する。

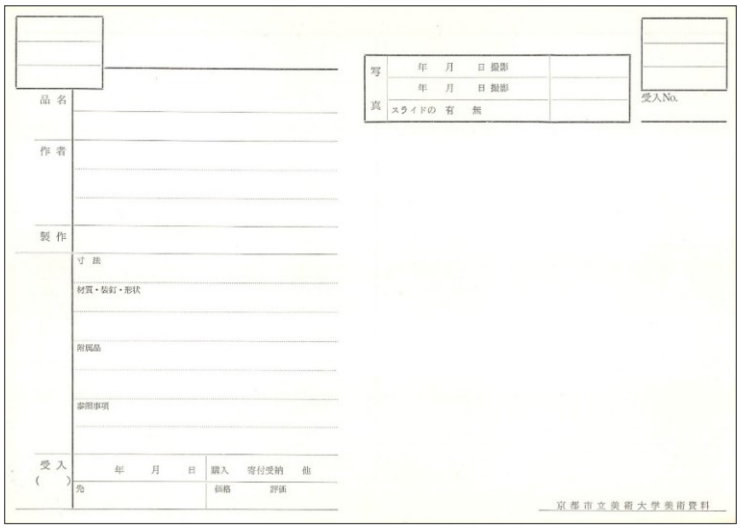
平成１2 年（2000）に旧参考品台帳の校歴資料のほか、卒業写真や図書館旧蔵文書などの現存する校歴資料の整理と登録が行われた。旧参考品台帳からのデータベース移行はこれで基本的に完了した。残るのは旧 1 門 4 類の図版類のみとなったため、令和 5 年の京都駅東校舎移転の際これらを整理して翌年登録し、旧図書台帳から参考品台帳への移行も同 6 年を以て終了している。

収蔵品台帳のデータベース移行にともない、資料の登録に一括資料が扱いやすくなったため、文書資料の受入が可能になったことは大きな改善であり、資料収集の幅を広げている。これら一括資料の管理と利用を効率的に行うために、平成 25 年（2013）に沓掛校地に隣接する旧京都市立音楽高校の校舎(7)を使って文書室を設置し、保管の用途にあてた。

一括資料のうち 200 点を越すものから一部をあげると、粉本では《望月家絵画資料》(2010 年受入)、《国井家旧蔵資料》(2022 年受入)、作家の素描では《石崎光瑶絵画資料》(1987 年受入)、《星野空外絵画資料》(1998 年受入)、《猪原大華絵画資料》(2001 年受入)、《野村耕絵画資料》(2015 年受入)、《入江波光絵画資料》(2023 年受入)、《小合友之助絵画資料》(1998 年受入)、《川端彌之助絵画資料》(2003 年受入)、工芸では《石原繁野旧蔵中南米染織資料》(2014)、《大川織物西陣織資料》(2019 年受入)、《世界のポスター10 人展ポスターコレクション》(1989 年受入)、文書では《塩﨑家旧蔵書簡資料》(2003 年受入)、《辻本コレクション富本憲吉アーカイブ》(2013 年受入)、《千熊家旧蔵資料》(2016 年受入）などが収集され、大学博物館らしい幅広い資料群を形成している。『参考品台帳』を作成した時点での収蔵件数は 1033 件だったが、新収蔵品と旧台帳からの再録分によって収蔵件数は増加し、令和 5 年の京都駅東への移転時には、4531 件と四倍を超すものとなっている。

芸術資料館設置後の収蔵品目録の刊行としては、大学創立 110 周年を記念して平成 2 年（1990）『土佐派絵画資料目録』の刊行を開始し、資料整理の進展に従い 9 冊(8)を刊行した。また芸術資料館開設年から『京都市立芸術大学芸術資料館年報』を刊行し、従来刊行していた新収蔵品目録を併合している。平成 21 年からホームページによる収蔵品検索サービスも開始し、データベースからの情報公開も徐々に展開されている。

図１　京都市立美術大学美術資料カード

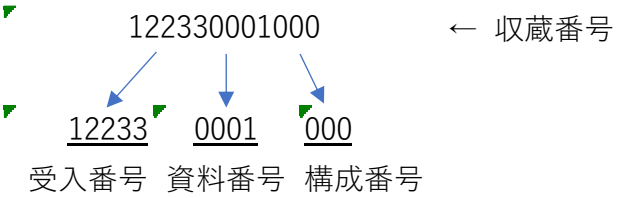


４．資料管理の方法

昭和 34 年（1959）の台帳作成以後、資料カードにより、資料情報が整理された。『参考品台帳』

にはあまり情報を記述することができないためである。資料カードは図 1 のような B5 版のカードで、『参考品台帳』に準じた仕様で作られている。平成 5 年（1993）から開始したデータベースの作成は、当初資料カードの機械可読化であったが、『参考品台帳』に基づいて作成されているため、資料番号の付与基準そのものに課題(9)があり、改善が求められた。そのため、台帳そのものをデータベースに置き換えることとし、資料番号を変更したのである。

新収蔵番号は 12 桁の番号とし、この番号に番号属性と資料属性を加えて運用することになった。12 桁の収蔵番号は 5 桁の受入番号、4 桁の資料番号、3 桁の構成番号からなる。枝番をはじめから内包させることで規格化し、当該資料が資料群全体の中でどこに位置するものかを理解しやすくするものである。5 桁の受入番号は受入時の基本的な区分で、資料の特質に合わせて単独資料もしくは一括資料を選択する。受入番号の左から第 1 桁は基礎区分で、旧台帳の種類を継承している。1 が参考品、2 が卒業制作である。残る 4 桁が受入番号の本体で、旧台帳の番号を一部継承して使用し、管理上の連続性をある程度確保している。資料番号の 4 桁は、受入資料を構成する資料数であり、単独資料の場合は”0001”となる。一括資料では”9999”まで付与できるため、1 件につき 9999 点まで扱える。構成番号の 3 桁は、1 点の資料を構成する資料数で組み物の員数を表す。基本は“000”であり、ここに数字が入る場合は複数の員数で構成されていることをあらわす。



収蔵番号には 1 から 7 の番号属性が付与される。1 は単独資料、2 は組物資料。3 は一括資料である。2 の組物資料を構成する個々の資料には 6 が与えられる。3 の一括資料は、内容として単独資料と組物資料から構成されるため、4 が一括資料内の単独資料、5 が一括資料内の組物資料、7 がこれを構成する資料ということになる。これらの番号属性の関係をまとめると、表 1 のようになり、class1 が収蔵件数、class2 が資料数、class3 が資料点数をあらわす。

表 3　資料数と番号属性の関係

<table>
<tr><td colspan="3">1</td><td>単独資料</td></tr>
<tr><td colspan="2">2</td><td>6</td><td>組物資料（親子）</td></tr>
<tr><td rowspan="2">3</td><td colspan="2">4</td><td>一括資料の中の単独資料</td></tr>
<tr><td>5</td><td>7</td><td>一括資料の中の組物資料（親子）</td></tr>
<tr><td>class1</td><td>class2</td><td>class3</td><td></td></tr>
<tr><td>収蔵件数</td><td>資料数</td><td>資料点数</td><td></td></tr>
</table>

基本属性は収蔵番号に付与されるものではなく、資料そのものに付与される。登録時に必ず付与する必要のある項目として以下の 4 種が設定される。原則は原本であるが、特殊な条件下で他の属性を付与することになっている。一般の博物館と少し異なる点として模本と複製が異なる項目となっている。模本を重視するこの博物館の所蔵構成から判断されている。

原本：唯一もしくは極めて少数が生産された資料
模本：原本に同じか近似する技法で制作された模造品
複製：版または型など介して製作された複写物や模造品
標本：多数存在するもののうちひとつを採集したもの

収蔵番号、番号属性、基本属性という３つの基本的な情報がすべての資料に対して付与され、データベースを構築する。ユニークなデータとなる収蔵番号に下記のような基本的な情報が連結される。

記録的情報　名称、作者、制作年、公開場所など
物理的情報　法量、材質、技法、形態、員数など
受入情報　受入区分、受入先、受入日、価額など
保管情報　状態、保管場所、保管形態、付属品など
記述的情報　落款、印章、賛、添状、箱書など

また、必須ではないが、統計などの報告のために、以下の属性も便宜的に付与されている。特に資料区分に関しては、資料そのものを分類する目的ではなく管理上の流動的な情報として扱っている。

時代　近世以前、近現代、両方
国　国２文字コード（原則的に制作地）
資料区分　絵画、彫刻、工芸、映像、写真、版画、書、デザイン、文書、自然科学

資料台帳としてのデータベースは当然のように、資料管理業務への活用が容易であり、「主催展示管理」「学外貸出管理」「学内利用管理」「画像貸出管理」「修復装備管理」のデータと連結させて、文書の作成も含めた業務に利用されている。

５．おわりに

戦後に新制大学への昇格を果たした美大は、戦前からの教育資料を継承することになった。時代の変化の中で、古い教育資料の中には、教育効果を疑問視されるものも生まれてくるが、一方でそうした資料のなかには歴史資料としての価値が見いだされるものも生まれる。芸大の所蔵する資料は教育資料から博物館資料へと変化することになった。

比較的共通理解の形成されている図書については、各大学間で規模の大小こそあれ管理が標準化されている。美大図書館も、NDC や目録カードの利用にはじまり、図書館システムの導入というかたちで、他の大学から何歩も遅れをとりながら機械化を進めることができた。美大から芸大に至る図書館の資料管理の道のりは、古い組織にありがちな特有の困難性はあったにせよ、順調に進んできたといえる。

一方、はじめは台帳形式で管理された参考品は、施設面の改善を受けて博物館的業務が確立する中で、資料カードによる管理を進めた。やがて台帳そのものをデータベースに移行することによって、より柔軟に資料を収集し管理する手段を模索するようになった。もともと図書管理を基本とする組織の所蔵品であったことから、博物館に多い分類と受入方針が先行する制度を採らず、受入段階では幅広い分野の資料を対象として、比較的緩やかな統制の中で受け入れることができたことが、柔軟な収

集の可能性につながっているものと思われる。

基本的に博物館の資料は独立性の強いものであり、個々に特有の価値を有するものといえるが、群としての価値がより大きな意味を持つことも多い。管理上、こうした文書資料に近い資料の構造化を図ることで、資料の価値がわかりやすくなり、一方で管理の簡素化にむすびつく利点がある。教材である図書の一部として管理された資料が、やがて博物館資料として歴史の遺産となり、一方で美術品のような鑑賞に資する博物館資料の収集も加わるようになる。現在の芸術資料館が持つ大学博物館の顔は、この歴史の中で培われた柔軟な収集態度を基盤としたものである。

【注】

[1] 美大昇格後も美専の在校生がいる間は美専も存続した。美専が閉校するのは明治 27 年 3 月である。

[2] 明治 39 年頃から使用された美工の図書台帳では八門分類を独自に改編した十門分類が使用された。8 門までが図書を主とする分類で、9 門は掛図類、10 門は粉本類となっていた。この美工での資料管理については拙稿「京都市立美術工芸学校・同絵画専門学校の教育資料」(『京都市立芸術大学芸術資料館年報』第 32 号、2023 年 3 月）を参照のこと。

[3] 重要なものとしては《土佐派絵画資料》《旧教員漆皿下絵帖》《槇村正直像》がある。かつて画学校を訪問したフランス人画家レガメーによる植村正直の素描画《槇村正直像》は京都府画学校時代に寄付されていたものだが未登録であった

[4] 昭和 37 年 4 月から大学に博物館学課程が設置され、陳列館は実習場所として報告されている。

[5] 展示室は附属図書館以外も使用が可能で、これら自主企画の展示も加えると 120 回程度の展示が行われたと伝えられる。

[6] 資料構成が簡単な卒業制作では平成 15 年度収蔵番号 978 番まで使用して停止した。

[7] 京都市立音楽高校の校舎移転にともない、平成 24 年から、収蔵庫として 2 階の 2 室の使用が開始した。128 ㎡と 64 ㎡の 2 室のうち小さい部屋を文書室とし、利用規程を定めている。

[8] 「肖像粉本(一)」「肖像粉本(二)」「内裏造営粉本」「鳳凰堂板絵･道釈画粉本」「絵巻粉本(一)」「絵巻粉本(二)」「画帖(一)」「画帖(二)」「画帖(三)」の 9 冊。最終刊は平成 12 年 3 月である。

[9] 組物資料は構成品の個々に収蔵番号が付与されるため。員数の多いものは資料管理が煩雑でわかりにくかった。また、点数の確認しにくい一括資料の場合、台帳収録そのものが困難な場合があった。